

| 報告番号                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        | 甲 乙 第 | 号 | 氏 名 | 角田 マツカンビラかるあ |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|---|-----|--------------|
| 主 論 文 題 名：<br>フォトディナミズモの理論と実践<br>A・G・ブラガーリア『未来主義フォトディナミズモ』の総合的研究と作品総目録                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |       |   |     |              |
| (内容の要旨)<br><p>本論文の目的は、20世紀初頭のイタリアにおける前衛芸術運動「未来派」において、アントン・ジュリオ (Anton Giulio Bragaglia, 1890-1960) とアルトゥーロ (Arturo Bragaglia, 1893-1962) のブラガーリア兄弟によって取り組まれた写真実験「フォトディナミズモ fotodinamismo」の総体を解明し、これを美術史ならびに写真史の文脈に適切に位置付け直すことで、再評価を行うことにある。本研究では、未来派におけるマニフェストないし芸術理論の特異な位置付けに鑑み、フォトディナミズモを理論と実践の総体をもって完成するコンセプチュアルな実験と捉え直すことで、そこで意図された芸術表現の明確化を目指した。そのために本研究では、この写真実験をめぐる理論と実践の集大成とみなせるアントン・ジュリオの著作『未来主義フォトディナミズモ』<i>Fotodinamismo futurista</i> (1913) を主たる対象に、理論研究・作品研究・受容研究の視座から総合的なアプローチを行うとともに、フォトディナミズモ作品総目録を作成した。</p> <p>第1章では、本研究を遂行する前提として、写真実験とその考案者をめぐる基本事項とともに、フォトディナミズモに対する評価史と研究史を整理した。1911 年春に、ブラガーリア兄弟によって考案された後、未来派の文脈に組み込まれたフォトディナミズモには、1913 年秋、未来主義画家たちから「異端通告」が突きつけられることとなる。未来派が、機械や速度、ダイナミズムの美を唱え、領域横断性を誇った芸術運動であった事実をふまえるならば、20 世紀初頭において、まだ歴史の浅い表現メディアであった写真は、カメラという機械を用いる点でも、一見すると、この芸術運動と親和性が高いように思われる。しかし、第一に、未来主義画家たちが追求したダイナミズムを一瞬に固定するという意味で、第二に、対象の物理的側面しか捉えられないという意味で、「冷たい複製の道具」であるとみなされたカメラによる成果物は、画家たち、とりわけその理論的主導者であったウンベルト・ボッチョーニ (Umberto Boccioni, 1882-1916) にとって「悪しきもの」であった。フォトディナミズモの「追放」を機に、未来派における写真芸術は低迷する。しかしそれは、モダニズム写真の世界的な興隆期である大戦間期に、「未来主義写真宣言」の発表をもって復権することになる。このマニフェストでは、およそ 20 年前に考案されたフォトディナミズモが、未来主義写真の独自性と正統性を裏付けるために象徴的に提示された。</p> <p>フォトディナミズモをめぐる研究は、アントン・ジュリオの没する 1960 年以降、さまざまな領域で着手される。本章では、この状況を 10 年ごとに区切って整理することで、先行研究において等閑視されてきた 4 つの論題を明らかにした。その論題とはすなわち、フォトディナミズモ作品および関連資料の所在状況、写真実験の着想源であった「未来主義絵画技術宣言」と『未来主義フォトディナミズモ』芸術理論の実質的な影響関係、未来主義画家たちやブラガーリア兄弟によるイタリア写真の状況に対する見解、アントン・ジュリオの過去の芸術に対する肯定的評価である。本論文においては、上述の論題のそれぞれを、2 章以降において考察対象に取り上げることとした。</p> |       |   |     |              |

フォトディナミズモをめぐる先行研究において、作品と関連資料の分析が見落とされてきた状況に鑑み、本研究では、可能な限り多くの研究機関や組織を対象に、これらの網羅的な収集に励んだ。本論文第2章では、その成果に基づき、フォトディナミズモ作品と関連資料について、実際に現物を手に取ってはじめてわかる情報を精査することで、ブラガーリア兄弟によるフォトディナミズモの実践の明確化を目指した。

第1節では、メトロポリタン美術館ギルマン・コレクションに所蔵される5点のヴィンテージ・プリントを取り上げ、ディスクリプションを行うとともに、その制作方法を考察した。ここでは、フォトディナミズモの画面が、人為的に構成されたものであることが確認された。

第2節では、『未来主義フォトディナミズモ』のオリジナル版に加え、本研究のアーカイブ調査において発見された一次資料（同書のタイプ原稿・ゲラ刷り）の精査を通じて、同書の芸術理論が、講演会の原稿やエッセイのために準備された断片的なテキストの組み替えによって成立した事態を指摘した。また、同書の刊行時期について、初版を1913年5月から6月上旬にかけて、第二版を1913年6月30日、第三版を1913年12月と新たに限定することができた。さらに、初版と第二版から《頭の動き》の図版が欠落している状況について、この掲載が、同作における「軌跡の消失」というイメージの性質にかかわる理由によって、意図的に見送られた可能性を提示した。

第3節では、アルトゥーロのスタジオの浸水被害により、フォトディナミズモをめぐるネガが消失している状況に鑑み、葉書、ヴィンテージ・プリント、刊行物掲載図版として残された作品を「フォトディナミズモ作品」と定義づけ、その種別ごとに分析した。まず、本研究のアーカイブ調査を通じて15点の所在が明らかになった葉書に関しては、その物理的な相違から、制作時期に三つの区分が設けられるという仮説を立てた。また、ヴィンテージ・プリントに関しては、メトロポリタン美術館が所蔵する先述の5点が、『未来主義フォトディナミズモ』等刊行物における掲載図版の製版のもとになった可能性を示した。さらに、図版に関しては、刊行物におけるフォトディナミズモ作品図版の掲載時期に、二回の隆盛期があることを指摘し、前者（1913年、兄弟の共同制作）と後者（1930年前後、アルトゥーロによる単独制作）のあいだで、掲載される新作図版の軌跡の表現に相違があることを明らかにした。

これらをふまえた上で、本論文においては、その存在が確認されるフォトディナミズモ作品のプレート全40点のうち30点を、1910年代初頭にブラガーリア兄弟によって共同制作されたものとみなし、作品総目録の対象とした。

第3章では、美術史的視座から未来主義絵画とフォトディナミズモの関係に着目することで、初期未来派におけるフォトディナミズモの位置付けを再考した。まず、第1節を通じて、未来主義絵画をめぐる基本情報を整理した上で、第2節では、『未来主義フォトディナミズモ』の芸術理論を、その着想源であった「未来主義絵画技術宣言」と照らし合わせることによって、このマニフェストにおけるどのような概念が、フォトディナミズモをめぐる芸術理論に持ち込まれたのかを考察した。マニフェストに取り上げられた4つの概念、すなわち「動的感覚」、「相互浸透」、「率直さ／純潔さ」、「分割主義」が、『未来主義フォトディナミズモ』の芸術理論においても踏襲された事実からは、アントン・ジュリオが未来主義画家たちと、理論的立場を概ね一致させていた状況が明らかになった。

フォトディナミズモは、未来主義画家たちが非難した写真の欠点、すなわち、ダイナミズムを一瞬に固定すること、そして、対象の物理的側面しか捉えられないことの克服を目指した写真実験であった。その上で上述した理論的立場の一致をふまえるならば、フォトディナミズモが異端視された理由は、どこにあったのだろうか。本章では続いて、初期

未来派におけるフォトディナミズモ批判の背景をより詳細に考察するために、ベルクソン哲学の影響下、未来主義者が関心を共有していた概念「精神状態 *stati d'animo*」に着目した。アントン・ジュリオとボッチョーニは、この概念をとりわけ熱心に研究し、自らの作品制作に取り入れた芸術家として知られている。両者の「精神状態」をめぐる見解を精査した結果、それぞれが、画面に登場する人物の精神状態の可視化を目指すなかで、異なった手法を採用していた状況が明らかになった。第3節では、ボッチョーニが可視化のよりどころを造形的要素に求めた一方、アントン・ジュリオが、実際の身体の映像に依拠した事態を指摘し、こうした見解の相違が、ボッチョーニによるフォトディナミズモ批判に結びついた可能性を提示した。

上記の見解の相違がはらむ根本的な問題を解き明かす鍵として、画家ジャコモ・バッラ (Giacomo Balla, 1871-1958) の未来派における位置は重要であろう。第4節では、今日「未来派の第一人者」として認識されているバッラの初期の未来主義絵画を、ボッチョーニが肯定的に評価していなかった事実を明確にした。ボッチョーニは、バッラの作品が、実際の身体の動きをあるがままに捉えるという意味で、写真メディア的な「現実性」に依拠しすぎていることを懸念していたのである。そしてボッチョーニによるこの懸念は、彼のフォトディナミズモ批判にも重ねられるものであった。

一方、バッラとその絵画《鎖に繋がれた犬のダイナミズム》を被写体求めたフォトディナミズモ作品《未来主義画家 G・バッラ》の存在は、「運動の絵画」に見られるバッラの運動表現に、ブラガーリア兄弟が共感を覚えた証とみなせる。たしかに、バッラとブラガーリア兄弟は、後述する「運動主義者」として、運動の表現方法をめぐって同じ方向を向いていた。しかし、本節におけるイメージの分析は、両者の運動表現における相違を明らかにした。アントン・ジュリオの言葉に従うならば、バッラ作品の運動表現においては、対象の複数化が「有限」なままにとどまる一方、対象の非物質化を目指したフォトディナミズモは「無限」を志向したのである。アントン・ジュリオは、「未来主義絵画技術宣言」に掲げられた「動きと光による物質性の破壊」が、フォトディナミズモにおいてより効果的に達成されることを自負した。これをふまえて本章では、アントン・ジュリオにとって、フォトディナミズモ作品《未来主義画家 G・バッラ》が、絵画とのパラゴーネにおいて、絵画に対する写真の勝利を象徴するものとなった可能性を示した。

第4章では、フォトディナミズモを写真史的視座から検討した。豊かな視覚文化を誇るイタリアは、長いあいだ西洋美術における「主役」であり続けたにもかかわらず、写真領域に限定するならば、その歴史が表に出ることはほとんどない。ならば、ブラガーリア兄弟がフォトディナミズモを考案し、未来主義画家たちがこれを異端視した背景に、イタリアの写真はどのような文脈を持っていたのだろうか。

これを探るために、第1節では、既存の写真史研究において示されるカテゴリー、「旅行写真」、「建築写真」、「アマチュア写真家」、「芸術写真」を指標に、その黎明期から20世紀初頭までのイタリア写真の状況を整理することで、そこに二つの特徴を提示した。すなわち、商業的文脈における「文化遺産偏重」と、芸術的文脈における「現実逃避主義」である。このような特徴を有するイタリア写真の状況は、未来主義画家たちにとって肯定的に受け入れられるものではなかった。第2節では、初期未来派をめぐるマニフェストの記述を分析することで、「現実性」に代表される写真の機能的＝必然的性質に加えて、歴史的＝付带的性質、言い換えるならば、イタリアの文化的文脈において培われた写真に対する固定観念もまた、未来主義画家たちによる写真嫌悪を助長させた事態を指摘した。

他方で、『未来主義フォトディナミズモ』の芸術理論の精査は、アントン・ジュリオも未来主義画家たち同様に、上

述の「現実逃避主義」に対して否定的であった状況を明らかにした。モダニズム写真は、まずは、ピクトリアリズムを批判することによって方向付けられる。これに鑑みるならば、アントン・ジュリオによる「現実逃避主義」に対する否定的な姿勢は、フォトディナミズムの既存の写真史における位置付け、すなわち「モダニズム写真の先駆」としての評価を裏付けるものとなる。しかし、その内実を精査することなく安易に、フォトディナミズムに「モダニズム写真」のレッテルを貼った既存の写真史研究は、この写真実験の特色を見落としてきたのではないだろうか。本章では、このような先行研究の状況を反省し、アントン・ジュリオの写真芸術観をテキストに忠実に考察することとした。

考察の前提として、第3節では、19世紀後半から20世紀初頭にかけての芸術写真の展開、すなわち、ピクトリアリズムからモダニズムへの移行を国際的な視座から整理した。第4節ではこれをふまえて、アントン・ジュリオが、同時代の芸術写真を論じたエッセイ「写真芸術」（1912）の記述内容を分析し、彼のピクトリアリズムに対する両儀的な態度を明確化した。アントン・ジュリオは、ソフト・フォーカス／ボケが用いられることで、「真実の正確な複製」から乖離することとなった像を肯定的に評価していた。写真の「現実性」から逃れようとし、その「鮮鋭性」を否定する彼のこの姿勢は、イメージの水準におけるピクトリアリズムへの接近とみなせるものであろう。同時に彼は、ピクトリアリズムを特徴付ける露光後のネガに手を加える行為、マニピュレーションに対して批判的な見解を示した。写真というメディアに固有な表現を重んじたこの姿勢は、制作の水準におけるモダニズムへの接近とみなせるはずだ。

このエッセイにおいて、アントン・ジュリオが自らの写真実験に言及することはない。しかし『未来主義フォトディナミズム』の芸術理論の精査は、上述した彼のピクトリアリズムに対する両儀的な態度が、フォトディナミズムにも持ち込まれた事態を明らかにする。したがって、これまで「モダニズム写真の先駆」として位置付けられてきたフォトディナミズムは、いわば「ピクトリアリズム的」な特色も持ち合わせていたわけである。この特色は、ピクトリアリズムとモダニズムの図式的な二項対立に基づく従来の写真史的言説の妥当性を問いなおす手掛かりとなるであろう。

さて、本論文では、『未来主義フォトディナミズム』芸術理論の冒頭における記述「永続的な動きを、表現された身振りの永続性のうちに、図として表現したい」を、フォトディナミズムの理念が集約された一文とみなす。この理念は、「生の躍動を、幅のある時間のうちに、目に見える軌跡として恒久化すること」と言い換えることができるだろう。第5章では、フォトディナミズムにおいてアントン・ジュリオが意図した芸術表現が、具体的にどのようなものであったかを明らかにするために、『未来主義フォトディナミズム』に掲げられるアントン・ジュリオ独自の概念を考察した。

その前提として、第1節では、アントン・ジュリオ自身がローマの美術関係者を対象に行ったインタビューに基づくエッセイ「芸術における写真」（1912）の記述内容を分析した。このインタビューは、当時のローマにおいて写真の芸術的正当性が、一般大衆のみならず、美術関係者からも認められていなかった状況を明らかにする。その背景には、カメラという機械に基づく写真が、生きた人間に固有な「魂」ならびに「いきいきとした生」とは相容れないものであると考えられていた状況が確認された。アントン・ジュリオは、この固定観念を覆すことが、写真の芸術的正当性の確立に繋がると考え、その役目をフォトディナミズムに託した。しかしながら、失敗写真にも見えかねないこの写真実験には、理論武装が不可欠である。フォトディナミズムの理論化において、アントン・ジュリオが重要視したのが、作品を特徴付ける「軌跡 *traiettoria*」、素朴な言い方をすれば「ぶれ」であった。

第2節では、フォトディナミズムにおける「軌跡」が、どのようなものとして意図されていたのかを考察した。アン

トン・ジュリオによれば、「運動の総合」とも言い換えられるこの「軌跡」は、作品を前にした観者の感受性に対して情動をもたらすものであり、「内面的な」性質を持ち合わせている。したがって、ここに含意されるのは、「ぶれ」という対象の外面的な動きの痕跡だけではない。フォトディナミズモにおいては、被写体＝人間の物理的な動きに、「いきいきとした生」ならびに「魂」の動き、すなわち精神的な動きを顕在化することが意図されたわけだ。本節ではさらに、アントン・ジュリオが『未来主義フォトディナミズモ』において示した、フォトディナミズモと失敗写真の相違点、フォトディナミズモの対極にスナップショットを位置付ける理由、生理学者エティエンヌ＝ジュール・マレー（Étienne-Jules Marey, 1830-1904）による連続写真の実験クロノフォトグラフィに対する非難を精査することで、このような意図を明確にした。

フォトディナミズモをめぐる先行研究は、アントン・ジュリオが『未来主義フォトディナミズモ』において、運動表現を意図した過去の芸術家たちに敬意を示し、その取り組みを分析していた事実を等閑視してきた。しかし、本研究におけるアーカイブ調査は、彼のこのような姿勢が示される同書における第10節「運動主義の先駆者たち」が、出版の直前まで推敲されていたことを明らかにした。さらに文献調査は、この節の内容を補完するエッセイの存在を再発見した。この節に、他の節に増して多くの頁が割かれたことから、アントン・ジュリオが「運動主義の先駆者たち」という論題に特別な想いを持っていた事態が窺える。こうした状況に鑑みて本章では、アントン・ジュリオが過去の芸術家たちと関心を共有し、フォトディナミズモを彼らの仕事の延長線上に位置付けることで、その芸術的正当性をより堅固なものにしようと意図していたという仮説を立てた。さらに、ここで共有された関心が、本章第2節で示した「対象の外面的な動きに、内面的な動きを、顕在化すること」であったとみなした。これを立証するために第3節では、アントン・ジュリオが自らと過去の芸術家たちを結びつける際に核とした独自の概念「運動主義 *movimentismo*」を考察した。

『未来主義フォトディナミズモ』の記述によれば「運動主義」とは、「実際の動きのただなかで進展する対象の実質的で現実的なダイナミズム」の具現化を目指す姿勢である。このような姿勢で制作された芸術作品を、アントン・ジュリオは「運動主義芸術」と呼称し、同書においてその表現を分析した。たとえば、運動主義芸術の作例には、画家ディエゴ・ベラスケス（Diego Velázquez, 1599-1660）の絵画《アラクネの寓話》が挙げられる。作業の速さを示すために、織女の手指を複数化したベラスケスは、硬直したスナップショット的表現を克服したとして高く評価された。ここで論じられるのは、絵画だけではない。アントン・ジュリオは、彫刻家ミケランジェロ・ブオナローティ（Michelangelo Buonarroti, 1475-1564）の《モーセ》にも着目し、慣習的な表現に必然的な動きの欠落を自覚し、彫刻一般に避けられない不動性を克服しようとした芸術家としてミケランジェロに一定の評価を与えた。

特筆すべきは、このような運動主義芸術の最古の例が、詩人ダンテ・アリギエーリ（Dante Alighieri, 1265-1321）が『神曲』に示したコンセプト「神の芸術」に見出されたことであろう。アントン・ジュリオが解釈するに、煉獄篇第10歌において、神の手によるレリーフを描写しようとしたダンテは、現世における通常の芸術作品との差別化を図るために、そこに人間の手には成しえない性質を与えようと考えた。その結果ダンテは、芸術一般にみられるような方法によらない、まったく新しい運動表現のアイデアを提示することになった。アントン・ジュリオは、ダンテのこのアイデアを「同じ一枚の絵のなかで絶えず、ある行為の一つではなく、複数の時間を表すことができる」ものとして高く評価する。そして彼は、ほかならぬこのアイデアこそが「我々の運動主義の方法」、すなわち

フォトディナミズモの方法であると主張した。これをふまえた上で本節では、アントン・ジュリオが「神の芸術」をフォトディナミズモの理想像とみなした状況を指摘した。

ところで、本章第2節では、フォトディナミズモとクロノフォトグラフィのあいだに、二つの相違点が認められることを確認した。すなわち、撮影方法と撮影目的の相違である。第4節では、アントン・ジュリオが意図した芸術表現について、上述の相違点から浮かび上がるフォトディナミズモの表現の性質を、彼が理想に掲げた「神の芸術」にみたであろう特徴と照らし合わせることで考察した。その上で、本節では、第一に、アントン・ジュリオが「神の芸術」の特徴として解釈した「永続性」を、自らの実験において理論化することによって、フォトディナミズモの芸術的正当性をより堅固なものとした可能性を指摘した。無論、テキストを通じて表明された「神の芸術」のコンセプトは、そのままイメージに踏襲できるものではない。その具現化に際して、『神曲』の再解釈という積極的な営みが認められることは強調すべきであろう。本節では、第二に、アントン・ジュリオが、ダンテのコンセプトを引き合いに出し、これを自らの実験の理想像に掲げることによって、彼がフォトディナミズモにおいて意図したものが「精神状態」の可視化であった事態を、戦略的に明確化しようとした可能性を示した。

さらに、アントン・ジュリオが解釈するに『神曲』における「神の芸術」は、「精神状態」までもが「永続性」をもって可視化されるものであった。これをふまえて本論文では、アントン・ジュリオがフォトディナミズモにおいて意図した芸術が、外面的な動き＝身振りのうちに、内面的な動き＝人間の「いきいきとした生」および「魂」を、途切れさせることなく顕在化するものであったと推測した。人間の内面こそ目を向ける姿勢は、人文主義的関心に、外面的な動きに内面的な動きを顕在化しようとする姿勢は、ルネサンス以来の芸術における本質的関心に、それぞれ重ねられるものである。したがってアントン・ジュリオは、フォトディナミズモの理論化の基礎に、芸術における伝統的な問題を置くという「戦略」によって、従来のピクトリアリズムとは異なる方法で、写真を「真に芸術へと高めよう」と目指したのである。

## Thesis Abstract

No. 1

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |                                       |                                                     |      |                           |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------------------------|------|---------------------------|
| Registration Number                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 | <input type="checkbox"/> “KOU”<br>No. | <input type="checkbox"/> “OTSU”<br>*Office use only | Name | TSUNODA, Macambira Kahlua |
| Thesis Title                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |                                       |                                                     |      |                           |
| Theory and Practice of Photodynamism:<br>A Comprehensive Study of A. G. Bragaglia’s <i>Fotodinamismo futurista</i> and Catalogue Raisonné<br>フォトディナミズモの理論と実践<br>A・G・ブラガリア『未来主義フォトディナミズモ』の総合的研究と作品総目録                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                       |                                                     |      |                           |
| Thesis Summary                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |                                       |                                                     |      |                           |
| <p>This dissertation seeks to elucidate the scope of photographic experiments, known as photodynamism (fotodinamismo), conducted by the Bragaglia brothers, Anton Giulio Bragaglia (1890–1960) and Arturo Bragaglia (1893–1962) within the early 20th-century Italian Futurist movement, aiming to reassess these experiments within the context of art and photographic history. Considering the significant role of manifestos and artistic theory in futurism, this study reinterprets photodynamism as a conceptual experiment achieved through the integration of theory and practice, thus clarifying the artistic expression intended in this experiment. To achieve this, the focus is placed on Anton Giulio’s 1913 publication <i>Futurist Photodynamism</i> (<i>Fotodinamismo futurista</i>), which is considered the apex of photodynamism theories and practices, employing a comprehensive approach that includes theoretical research, artwork analysis, and reception studies. Additionally, a catalogue raisonné of photodynamic studies was created.</p> <p>Chapter 1 establishes the foundational knowledge of photographic experiments and their creators as well as the historiography of photodynamism evaluations and research, providing a premise for further examination in this dissertation. It identifies four overlooked topics in previous studies: the location of photodynamic works and related materials, the theoretical interactions between <i>Futurist Photodynamism</i> and the “Futurist Painting: Technical Manifesto (Pittura futurista: Manifesto tecnico),” the perspectives on Italian photography by Futurists and the Bragaglia brothers, and Anton Giulio’s positive assessment of past art. The subsequent chapters discuss these issues.</p> <p>Chapter 2 examines photodynamic works and related materials, specifically focusing on the monograph <i>Futurist Photodynamism</i>, and deliberates on pertinent issues based on information obtained through direct examination. The chapter also analyzes problems concerning the publication date and history, categorizing photodynamic works by type (postcards, vintage prints, and published plates) to clarify their practice. Additionally, a catalogue raisonné of 30 photodynamic plates, likely created collaboratively by Anton Giulio and Arturo, was provided.</p> <p>Chapter 3 examines the relationship between early Futurism and photodynamism. A comparison of the theories of <i>Futurist Photodynamism</i> with “Futurist Painting: Technical Manifesto” reveals that Anton Giulio’s theoretical stance generally aligned with that of the Futurist painters. However, regarding the concept of “states of mind (stati d’animo),” a shared interest among early futurists, differences in perspective emerged between the painter-theoretician Umberto Boccioni (1882–1916) and Anton Giulio. Both sought to visualize the psychological states of the figures on the screen but adopted different methods to achieve this. Boccioni relied on plastic elements for visualization, in contrast to Anton Giulio’s dependence on images of actual bodies.</p> |                                       |                                                     |      |                           |

## Thesis Abstract

No. 2

This chapter analyzes the background of this conflict by examining Boccioni's negative evaluation of Giacomo Balla (1871–1958), highlighting Boccioni's critical stance toward the inherent “realism” of photographic media that relies on real subjects.

Chapter 4 investigates the Italian photographic context that influenced the development of photodynamism and ultimately led to its exclusion from the Futurist movement. The Italian photographic scene, marked by a preference for “cultural heritage” and a sense of “escapism,” was poorly received by both the Bragaglia brothers and the Futurist painters. This chapter explores how these conditions generated an anti-photographic sentiment among Futurist painters while propelling the Bragaglia brothers toward photographic experimentation. Furthermore, it discusses how photodynamism, often regarded as a precursor to modernist photography, diverged from modernist norms of clarity by embracing pictorialist elements that distanced it from photography's inherent “realism.”

Chapter 5 explains Anton Giulio's artistic expression, aimed at achieving photodynamism to advance photographic art. He believed that challenging the conventional idea that photography was incompatible with concepts like “spirit” and “living vitality” would establish photography's artistic legitimacy, a role he entrusted to photodynamism. To support his experimental approach—sometimes seen as failed photography—Anton Giulio highlighted the idea of “trajectory” as an “internal” element that evokes emotional responses in viewers. This chapter concludes that his artistic vision was to reveal a subject's inner movement through the external depiction of “trajectory.” Furthermore, Anton Giulio argued that his interest, which he uniquely termed “movimentism (movimentismo),” was shared by past artists, thereby enhancing the artistic credibility of his work. Notably, he embraced the idea of Divine Art as presented by the poet Dante Alighieri (1265–1321) in *Divine Comedy*, viewing it as an ideal for photodynamism. By theorizing the characteristics of Divine Art, Anton Giulio clarified his intent in photodynamism: to continuously manifest the spirit's inner movement through the outward movement of the body, thereby seeking to “elevate photography to true art” in a manner that distinguishes it from traditional pictorialist photography.